

発端

新しい鉾脈

もう一人のひばり

17 7
5

古賀 政男

古賀政男伝

母の血、父の血

ひばりの戦争体験

焼け跡のシンデレラ

23
25 36 45 52

川田 晴久

歌のエンサイクロペディア

悲しみをうたうひばり

67
69 96

竹中 労

ガイドブック

107
109

風狂の人

似たもの同士

ひばりへの直言

黄金バット

探し、探し求めて……………165

広島平和音楽祭

ひばり教

ひばりの隠れた魅力

反体制の時代

本命は竹中か

新たな竹中伝説

天馬空を行くごとき “狂の人”

一九七四年八月九日、広島……………231

あこがれの労音

ひばりに「1本の鉛筆」をうたわせたのは

239 233

231

218 213 207 203 190 183 167

155 139 123 117

広島の夏

253

あとがき

258

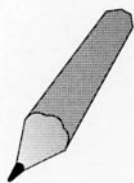
- ・竹中英太郎・労関連年表抄（一九八二～一九六五）
- ・美空ひばり関連年表抄（一九六四～一九六五）
- ・参考文献

260 113 119

装幀 勝木雄二

発

端



新しい鉾脈

「小笠原さん、金城広子さんって知ってるでしょう？」

若穂井ヨリ子が電話でたずねた。彼女は私の知人で、弁護士の若穂井透の奥さんである。

「『星の会』でうたったのを聞いたことがあるから、知ってるよ」

「『星の会』とはサッポロビールが主催する会で、そこで開催されたミニコンサートで、金城がうたったのを一度、私は聞いたことがある。

「その金城さんがね、今度、松戸の市民劇場でコンサートをやることになったのよ。悪いけど、チケットを一〇枚ほど預かってもらえないかしら。大丈夫よね。小笠原さんなら顔が広いから」

若穂井ヨリ子は電話口で決めつけるようにいった。

「それぐらいなら、おれでもさばけるよ」

私は即座に引き受けた。

「よかったわ」

ヨリ子の声が弾んだ。

「それでいくらなの？」

「ちょっと高いの……、四千円だけど」

彼女はいいずらそうにいった。

四千円は高い。私が引き受けるといったのは、二千円ぐらいと思っていたからである。それぐらいなら、売れなくても自腹を切ってもいい。大体、このあたりでは、三千円が相場で、名前が知られた加藤登紀子でも三千円であった。金城は日本コロンビアに在籍していたとは聞いていたが、無名にちかい。四千円では、とうていさばけない。

「四千円かア。それならせいぜい三枚だね。おれが売れるのは」
私は小さな声で答えた。

「そう。しょうがないか。それではチケットを送るからきてよね」
若穂井ヨリ子が電話を切った。

コンサートの日がきたので、私は付き合いで松戸市民劇場に行った。会場は定員三〇〇人の小ホールだが、開演二〇分前なのに、すでに八分の入りで、五分前には立ち見の客まで出た。私はせいぜい入って半分の一五〇人と踏んでいたが、三〇〇人をこし、これにはおどろいた。若穂井ヨリ子の力量は相当なものである。

お客の大半は四〇歳以上の女性で占められ、それぞれがめかし込んで開演を待ち、会場は華やいだ雰囲気につつまれていた。しゃべり声でうるさいぐらいである。

幕が開く。金城広子が舞台中央にすすみ、スポットライトを浴びた。舞台上手にピアノ、中央にドラムを配し、下手がチェロである。金城は胸の大きく開いた真っ赤なドレスに身を包み、うたいはじめた。

最初の歌は「誰もいない海」で、つづいて「ラストダンスは私に」「小さな喫茶店」「コンドルは飛んでゆく」とポピュラーな曲がつづく。他にタンゴやシャンソンまであって、彼女のレパートリーは広い。金城はプロの歌手らしく、それらの曲をそつなくこなしていった。

曲と曲の間に短い語りがあつて、洒落た話でつないでいく。話芸もそこそこで、客を飽きさせないが、背筋をぞくぞくさせる歌がない。これで終われば、四千円は高い。どうしても加藤登紀子と比較し、力の差を感じる。義理できても金を出したからには、それなりの歌を聞きたい。私は少々苛立ちをおぼえた。

一部が終わり、二部となった。「銀座カンカン娘」「蘇州夜曲」「星の流れに」とつづき、舞台は一転、見違えるほど金城広子は生き生きとうたっている。舞台を広く使い、振りも大きく、高音から低音まで自在にこなし、満席の観客を魅了する。その変わりように私は眼を見張った。金城広子は歌謡曲の歌手だった。舞台は佳境へとすすんでいく。金城の持ち歌「あかんだれ」がはじまる。作詞は金城自身で、作曲家の梅原司平が、彼女のために曲をつけた。

あかんだれやな ホンマにしようもないやつぢゃな

子どもの時から そない言われて

あかんだれやな わては不器用やさかい

一生懸命やるしか ないねん

金城広子は自分の人生を歌に托した。

会場から拍手がなりやまない。観客は興奮していた。アンコールの声があがる。金城がアンコールに応えた。はげしい拍手に送られて、金城広子は舞台の袖に消え、コンサートは終わった。会場はしばし酔いしれていた。

私はロビーに出て、たばこに火をつける。そこにブーケをつけた若穂井ヨリ子が、ハイヒールの音をたてて、颯爽とやってきた。

「どお、よかったですよ」

若穂井ヨリ子が自慢気な顔で聞いた。

「よかったですよ。四千円の価値はあったな」

「小笠原さんたら、また、そんなことをいって」

ヨリ子が眼を細める。

「このあと、席を用意したの。くるでしよう？」

「行くよ。いい歌を聞いたあとだもの」

私が笑みで答える。

「よかったですわ」

ヨリ子はあと片づけがあるといつて、その場を離れた。主催者は何かと忙しい。

「やあ、めずらしい」

私の肩をたく人がいた。振り返ると、色白で痩せぎすの五〇歳代の男が立っていたが、名前がすぐに思い出せない。たしか椎名ではなかったか。

「椎名さんですよね」

私は恐る恐るたずねた。

「忘れちゃ困るな。ぼくは君のことをおぼえているんだから」

椎名が苦笑する。

椎名を私に引き合わせたのは、弁護士若穂井透で、私と彼とがある冤罪事件に取り組み、運動をやったとき、椎名は手伝ってくれた。それは十年前のことで、すっかり彼のことを忘れていた。椎名一夫はモンブラン山群のグランドジョラスの北壁やカイザー山群のトーテンキルヒルの西壁を登攀した山男で、友人には遭難死した長谷川恒男や宇部明といった著名なアルピニストがいた。

「若穂井さんの奥さんが席を用意してあるっていうから、これから行かない？」

私が椎名を誘った。

「行こうか。君に会うのは久しぶりだし」

私たちが飲み屋につくと、すでに料理が並んでいた。先にきていた若穂井透が、顔見知りの人たちに会釈をしながら、飲み物をテーブルに置いてまわっていた。懇親会には四〇人ちかくが集まり、ヨリ子の挨拶で会はずじまった。

彼女はこのコンサートにむけて、「野に咲く花の会」をつくり、知人宅をまわり、ホームコンサートを開き、チケットを依頼して歩いた、という。そうでなければ、これほどの人は集まらない。彼女の地道な活動が盛会の裏にあった。ヨリ子の挨拶が終わり、金城広子が礼を述べ、ヨリ子の音頭で乾杯となった。

演奏家たちも、この席に招かれていた。私の前に若穂井透と椎名が、とんがりにはピアニストの後藤寿美がすわった。しばらく私と椎名と若穂井が近況を話し合い、それが尽きると、椎名はとんりの席に移った。私の話し相手は若穂井となった。

「ところで小笠原さんは、音楽のほうはどうなの？」

「まるっきりダメよ。小学校の学芸会なんて、決まってカスターネットだよ」

「カスターネットか」

若穂井は血色のいい大きな顔をピシャリとたたいて笑った。

「そういう若穂井さんはどうなの？」

「おれは合唱団だもの」

若穂井が縁なしの眼鏡に手をあてて胸をはった。

「そうだったな。若い頃、たしか奥さんと合唱をやっていたんだね」

若穂井透は、合唱団でヨリ子と知り合い結婚している。

ピアニストの後藤寿美を交えて、三人で音楽談義に花が咲く。となりの席から椎名の声が聞こえて

あとがき

本書を書くきっかけをつくってくださった登山家の椎名一夫氏（第二次RCC同人）にまず感謝を申し上げたい。氏は現在、環境問題に取り組まれているが、その姿勢に敬意を表したい。また、私の取材に快く応じてくださった諸氏に厚くお礼を申し上げる。

この原稿は一〇年前に書きあげ、ある出版社から出される予定だったが、編集者との意見の相違でそのままになっていた。このたび、時潮社編集長の西村祐紘氏によって日の目を見ることになった。これまでとはちがったジャンルで、レバートリーが広がり、うれしく思っている。

私が再度、本にしようと思ったのは靖国問題や憲法改正のことなどで、世の中がきな臭くなってきたからだ。戦争にかぎらず、本当の悲惨さは体験した人でなければわからない。戦後六〇年がたち、戦争体験を持つ人たちが少なくなってきたが、改めて、戦争の悲惨さに思いを馳せてみる必要がある。戦争を仕かけた側に利害はあっても、正義はない。アメリカが仕かけたイラク戦争を見ればわかる。戦争を二度と繰り返してはならない。還暦をむかえた私のささやかなメッセージである。

小説と同じようにノンフィクションも物語を想像しながら取材していくが、本書は予想に反した結果になった。それがノンフィクションの醍醐味で、人間、美空ひばりの知られざる一面が明らかとなった。

ひばりは平和を希求する人だったが、同時に子どもたちの未来に思いを寄せ、福祉事業に心をくだいてきた人でもあった。現在、「ひばりプロダクション」では、彼女の遺志を引き継ぎ、新種として誕生したバラを、その名も「美空ひばりピースローズ」と名づけ、それを販売し、収益の一部をポリオやほかのワクチンの購入費として日本ユニセフ協会に寄付している。このことはあまり知られていない。

ひばりの一七回忌は終わったが、テレビで彼女の特集が組まれ、記念切手が発売されるなどひばり人気は相変わらず根強い。また、若い女性歌手がひばりの曲をうたいはじめ、若者にも受け入れられてきた。

美空ひばりは四〇〇年に一度しか現れない天才歌手といわれているが、今後が変わらずに語り継がれていくにちがいない。筆者としては、本書がきっかけとなり、新たなひばり伝説が誕生することを願ってやまない。

小笠原 和彦

二〇〇六年二月一日

【参考文献】

本書の執筆にあたって以下の書籍、雑誌を参考にさせていただきました。ありがとうございました。（著者）

『ひばり自伝』美空ひばり、草思社、一九八九

『イカロスの翼』上前淳一郎、文芸春秋、一九七八

『戦後』美空ひばりとその時代、本田靖春、一九八九、（講談社文庫）

『花のいのち』黒田耕司、小学館、一九九〇

『美空ひばり 時代を歌う』大下英治、新潮社、一九八九

『美空ひばり』竹中労、弘文堂、一九六五

『美空ひばり』（増補）竹中労、一九八七、（朝日文庫）

『美空ひばり 歌う女王のすべて』文芸春秋編集部編、一九九〇、（文春文庫）

『自伝わが心の歌』古賀政男、展望社、一九八二

『昭和流行歌の軌跡』池田憲一、白馬出版、一九八五

『姉・美空ひばりと私』佐藤勢津子、講談社、一九九二

『地球の上に朝が来りゃ賭けかけカケの人生だ』灘康次、翼書院、一九八六

『風のアナキスト竹中労』鈴木義昭、現代書館、一九八四

『愛燦燦・ひばり神話の真実』西村克子、徳間書店、一九九三

『イエスタデイ』永井晶子、CBS・ソニー出版、一九八九

『たま』の本』竹中労、小学館、一九九〇

『ひばり模様』御木平輔、七賢出版、一九八四

『冷蔵庫』木村聖哉、紅ファクトリー、(私家版)

『東京労音運動史年表』東京労音運動史編さん委員会、東京労音、一九九四

「あきれた自叙伝」川田晴久、雑誌『中央公論』、一九四〇、中央公論社

「ひばりさん あなたの歌で生きてきました」マガジンハウス、一九八九、(マガジンハウスムック第12号)

「無頼の墓碑銘」竹中労、『名作挿絵全集』(全一〇巻)、平凡社、一九七九〜八一

月刊『わらび』一九八九年九号